

中世ヨーロッパの伝説

—— (4) (完) タンホイザー／ローエングリン ——

高 木 昌 史

序

第一章 タンホイザー Tannhäuser

リヒャルト・ヴァグナーの歌劇でも有名な中世の歌人タンホイザーと白鳥の騎士ローエングリン、本稿は以上二題を取り上げる。今回はグリム兄弟 *Brüder Grimm* 編『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen* (以下DSとも略記) を中心に論を進めるが、右の二つの伝説に関しては特に、十字軍、ローマ教皇、ヴェーヌス山、アーサー王、聖杯、フランク族等、中世ヨーロッパ世界を彩るキーワードが注目される。

グリム兄弟編『ドイツ伝説集』DS第一卷(一八一六年刊)一七一番「タンホイザー」(*Der Tannhäuser*)には、中世の伝説的歌人の物語が散文で収録されている⁽¹⁾。出典は一七世紀ドイツの作家ブレートリウス *Prätorius* の「プロックスベルク」*Blockberg* (一六六八年) 所収の古い民謡である。一方、DS以前に刊行されたA・v・アルニム／C・ブレンターノ編『少年の魔法の角笛』*A.v.Armin/C. Brentano : Des Knaben Wunderhorn* (一八〇六—一八〇八年) 第一卷(一八〇六年刊)には、同じブレートリウス作「プ

ロックスベルク」の古い民謡が詩の形式のまま掲載されている。²⁾本稿では、この民謡のテキストを翻訳・紹介することにした。〔ダッシュ〕は行変えを示す。

タンホイザー

コルマン「ヴェーヌス―ベルク」、のち、プレトリーウス「プロックスベルク」(ライプツィヒ、一六六八年)
一九―二五頁

さあ、始めよう、／タンホイザーを我らは歌おう、／
ヴェーヌス山の女たちと行った／彼の奇跡の数々を。

タンホイザーは立派な騎士だった、／彼は偉大なる奇跡を見ようと、／ヴェーヌス山に入った／美しい女たちの許へと。

「タンホイザー様、愛おしいお方、／思い出してください、／あなたが私に誓ったことを、／私への愛は揺るぎないと。」

「ヴェーヌスよ、いや違う、／私は反対する、／そなた以外そのような事を言う人はいない、／神よ、私を正しい人々の許へ行かせ給え。」

「タンホイザー様、何ということと言われるのです！／私たちの許に留まり下さい、／あなたに仲間の一人を差し上げましょう／あなたの妻として。」

「私が思っているのとは違う／女を受け入れるとしたら、／私は地獄の炎の中で／永遠に燃え続けなければならないだろう。」

「あなたは地獄の炎のことをよく口にされますが、／それを見たことはありません。／私の紅い唇を思い出して下さい、／いつも微笑んでいる唇のことを。」

「そなたの紅い唇が私に何の役に立つのか、／私にとってそれは何ものでもない、／さあ、私に暇を下さい、優しいヴェーヌスよ、／すべての女性の名誉にかけて。」

「タンホイザー様、暇が欲しくても、／私はあなたにそれをあげられません、／さあ、留まつて下さい、氣高く優しいタンホイザー、／あなたの人生に息吹を与えなさい。」

「私の人生はすでに病んでいる、／これ以上留まることは出来ない、／私に暇を下さい、優しい方よ、／そなたの誇り高い肉体から。」

「タンホイザー様、もう言わないで、／あなたは氣分が悪いのです。／さあ、部屋へ行きましょう／密かな愛を戯れに。」

「そなたの愛は私には苦痛となった、／私の心の中には、／おお、ヴェーヌスよ、高貴で優しい処女がいる、そなたは魔女だ。」

「タンホイザーよ、ああ、どうしてそのような事を言うのです、／あなたはどうしても私を非難するのです」

ね？／私たちの許にもっと長く留まりなさい、／あなたは言葉に償いをしなければなりません。

タンホイザー、暇が欲しければ、／年寄りたちに暇乞いなさい、／國中、何処を歩き回つても、／私を称賛することになるでしょう。」

タンホイザーはまた山を出た／悲嘆し後悔しながら。／「私は敬虔な町、ローマへ行こう、／すべてを教皇に打ち明けよう。」

さあ、楽しく旅をしよう、／神の御心のままに、／ウルバヌスという名の教皇の許へ、／あの方が私を受け止めてくださるかどうか。

教皇様、わが教父様、／私はあなたに自分の罪を訴えます、／私が生涯に犯した罪を、／私はあなたに告白します。

私は丸一年間／ヴェーヌスの許に、女の許におりました

た、／今、私は告白し懺悔をしたいのです、／私が神にお目通り出来るかどうか。」

教皇は一本の白い杖を持っていた、／それは枯れ枝で出来ていた。／「この杖が緑の芽を出したら、／そなたの罪は赦されよう。」

「二年以上生きられないのなら、／この地上にいられないのなら、／私は改悛と懺悔をして／神のご慈悲を得たいのです。」

そこで彼はふたたび町から出て行つた／悲嘆し苦しみながら。／「聖母様、マリア様、清らかな処女よ、／あなたにお別れを告げなければなりません、

私はふたたび山に入ります／永遠に、終わりなく／わが優しき女、ヴェーヌスの許へ、／神の御心のまま、送られて。」

「ようこそ、タンホイザー、良き方、／久しくあなた

が居られず、寂しゅうございました、／お帰りなさい、私の最愛の方、／忠実に私の許へ帰って来られたあなたは立派な方。」

その後、三日目／杖は緑の芽を出し始めた、／そこで国中へ使者が送られた、／タンホイザーが向かった国々へ。

その時、彼はふたたび山にいた、／今や、彼はその中に留まることになった／最後の審判の日まで、／神が指し示すその日まで。

司祭は決してこのようなことをしてはならない、／人間に慰めない気持ちを与えてはいけない、／懺悔と改悛を行おうとするなら、／その罪は赦されてしかるべきだ。⁽³⁾

ローマ神話の美と愛の女神ヴェーヌス Venus（＝ヴィーナス／「ギリシア神話＝アフロディテー」）と騎士タンホイザーの会話を軸に、右の民謡は、四行一節全二六節の中

で、異教とキリスト教、信仰と快楽の狭間に揺れ動く主人公の姿を伝えている。因みに、同じ出典に拠るグリム兄弟の「タンホイザー」は、主人公の「良心」Gewissenの目覚め、「女の悪魔」die Teufelin（＝ヴェエヌス）等、信仰上の陰影を明確化する表現を加えながら、伝説を分かりやすい散文にまとめている。

民謡版「タンホイザー」は、それに比べ、unnehre = unmere (unwert/gleichgültig) (無価値な／どうでもよい)、『han = haben (持つ)』emphän = enfahen (entgegennehmen) (受け取る)、『Mistrost < mißröstig = untröstlich (慰めない)』等、初期新高ドイツ語の単語を随所にちりばめて、全体に古風な雰囲気醸し出している。と同時に、会話体を導入することによって、作品にドラマティックな緊迫感と盛り上がりを与えてもいる。以下、騎士タンホイザーその人と異教の女神ヴェエヌス（山）を中心に、この伝説の歴史的・社会的背景を探ってみよう。

タンホイザー Tannhäuser (図版1)

主人公に関して、最初に注意すべきは、本稿で紹介した



図版1 十字軍参加者あるいは巡礼衣装のタンホイザー
(ハイデルベルク歌謡写本)

伝説上のタンホイザーと、実在上の騎士タンホイザーを区別することである。⁽⁵⁾一六世紀以降、特に有名になった伝説では、タンホイザーのヴェエヌス山での体験が主題となっているが、歴史上の人物として、⁽⁶⁾今日、彼については、次のような事柄がほぼ確認されている。

タンホイザーは、バイエルンおよびザルツブルクに定住したタンフーゼン Tannhusen 家出身の宮廷歌人＝ミンネゼンガー Minnesänger であった。一二〇五年頃、ニュルンベルクの東南ノイマルクト近くのタンハウゼン城に生ま

れた彼は、一二二八年から二九年にかけて、神聖ローマ帝国の皇帝フリードリヒ二世の十字軍に参加し、その後、ウィーンの皇帝の宮廷で庇護を受けたが、一二四六年、フリードリヒ二世が没した後は、遍歴の旅に出て、諸国の宮廷に身を寄せながら、一二六七年頃、亡くなったようである。

レクラム版『ミンネザング』Minnesang⁽⁷⁾あるいは『中世ドイツ詩集』Deutsche Gedichte des Mittelalters⁽⁸⁾には、彼の詩作品が数篇収録されている。例えば、ライヒ・Leichと呼ばれる詩形式の「冬は過ぎ去った」Der winter ist zergangen⁽⁹⁾では、ようやく冬が去り、多彩な花々が咲き乱れる野を散策する晴れやかな感情が歌われ、また「忠実なる奉仕は良きものなり」Staeter dienst der ist guotと題するカンツォーネでは、「高きミンネ」の喜びと同時にそのパロディー化がなされて興味深い⁽¹⁰⁾が、初期の詩の中では「今、鷹狩りに行くことが出来る者は幸せなり」Wol im, der nu beissen sol⁽¹¹⁾が特に注目される。そこでは、後のタンホイザー伝説とは異なり、十字軍という中世ヨーロッパの歴史上の大事業がある種リアルに歌われており、そこから我々はタンホイザーの実像を垣間見ることが出来る。全五節の

その詩を簡単に覗いてみたい（以下要約⁽¹¹⁾）。

アプリーエンの野で鷹狩りに興じることが出来る人は幸せだ、私は今海を漂っている（第一節）。苦しみ多い私は何処にも留まらず、風のまにまに流れ行くのみ（第二節）。クレタ島では危うく死ぬところだった。大風で櫂は折れ、帆も千切れ、ただ我慢しなければならなかった（第三節）。バルバリーエから吹く風は激しく、トルコからの風も荒れ狂い、飲み水は濁り、ビスケットは固く、肉には塩、ワインには黴、心が弾むことはない（第四節）。馬で進むことが出来る人は幸いだ。東からはシロッコ、アルプスからはミストラル等々、十二の風があることを、ニュルンベルクの南にいたら知らなかった。でも、故郷を後にしたのは、神に仕えるためで、風の名を覚えるためではない（第五節）。

ドイツを後にイタリヤへ来た「私」は、広い海の上、苦勞の絶えない航海の日々を送る。中でも、第五節末尾「風の名を覚えるためではない」は、何か自虐的な滑稽味さえ感じさせる。他の詩で「高きミンネ」をアイロニカルに歌

うタンホイザーの真骨頂が、ここにも發揮されている。歴史上のこの騎士は、前述のように、一二二八年から二九年にかけて、フリードリヒ二世（一九四—一二五〇年）の率いる第五回十字軍に従軍した（図版2）。

ハインリヒ六世の子として、イタリアのシチリア島に生まれ育ったフリードリヒ二世 Friedrich II. は、一九七七年にナポリ・シチリア王となった後、一二一五年にアーヘンでドイツ王となり、一二二二年にはローマで帝冠したが、シチリア島のバレルモに宮廷を構え、国際人として学芸の振興に大きく寄与した最初のルネサンス人とも呼ばれる（図版3）。彼が率いた十字軍は、一二二八年六月、イタリア半島の踵の部分に当たるプリンデイシを出航し、クレタ島、キプロス島を経由して、九月、アッコンに上陸した。そして、詳細は略すが、イスラム教徒との戦闘のないまま、フリードリヒは、一二二九年三月、聖墳墓教会でエルサレム王となった。

この十字軍に参加した当時、タンホイザーは二十三歳、フリードリヒ二世は三十四歳であった。騎士タンホイザーの従軍の様子は、先に紹介した詩が皮肉交じりに、彷彿とさせてくれるが、プリンデイシのあるアプリーエン地方の

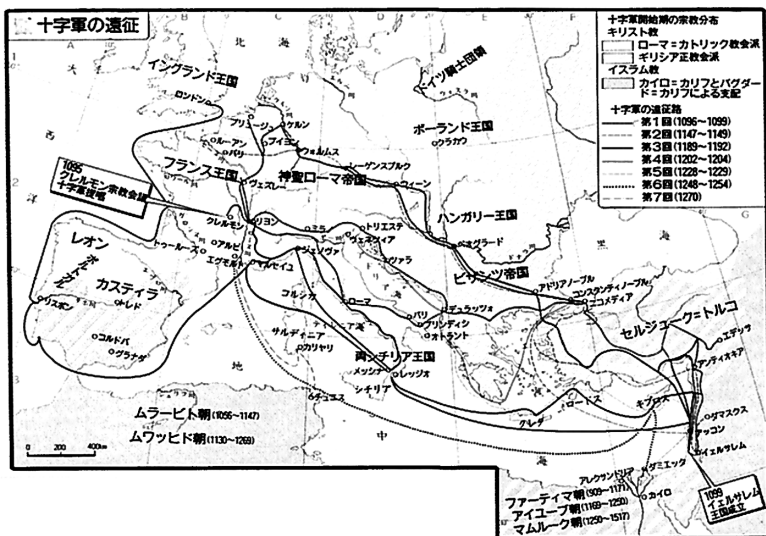
自然描写や地中海の風の種類を数えあげる詩人のペンには、得も言われぬ透明感がある。

ヴェーヌス山 Venusberg

一転して、伝説の中の騎士タンホイザーの姿には、何と不透明な影が付きまとうことか。そこでは、異教の女神ヴェーヌスが絶えず背後に控えている。ギリシア・ローマ神話のこの愛と美の女神は、中世ヨーロッパの文化風土の中では、表面上、嫌われ役となっている。

ヴェーヌスは、古来、平和や喜びや幸せをもたらす反面、その愛と美ゆえに、様々な戦争、苦悩、恐怖そして絶望の原因ともなってきた。特に、中世キリスト教世界において、ヴェーヌスは七つの罪の一つである肉欲を意味する存在として敬遠され、歪曲されたイメージが形成された。タンホイザー伝説はまさしくその最たる例に他ならない。¹³

肉の快楽に溺れた騎士は、己を自覚し、女神を山中に残して、ローマ教皇の許へ赦しを請いに出発する（第一五節以下）。教皇の名はウルバヌス Urbanus、歴史的に見て、四世（一二〇〇頃—一二六四年、在位、一二六一年—六四



図版 2 十字軍の遠征



図版3 パレルモ大聖堂（シチリア島）

年)である⁽¹⁴⁾。

他方、タンホイザーは、庇護者フリードリヒ二世の没後、諸国を流浪し、一二六七年頃、亡くなったとされる。従って、伝説中の彼は、晩年に近くなつてヴェーヌス山に入つたことになる。この山はテューリンゲン地方、アイゼナハ近くにあるヘルゼルベルク Heselberg がモデルとされている⁽¹⁵⁾。それに関して、ヤーコブ・グリムは『ドイツ神話学』の中で興味深い見解を述べている。

「ホルダ Holda とヴェーヌス Venus の同一性は疑いない。この山（幾つかの文献によれば、アイゼナハ近くのホーゼルベルク Heselberg、ヘルゼルベルク Heselberg である）は、ホレ叔母さん Frau Holle の豪華な住居で、一五・六世紀になつてようやく、そこからヴェーヌス夫人 Frau Venus 「像」が形成されたらしい。彼女は地下の洞窟に小人の王様 zwergekönig のように、堂々と豪華に暮らしている。幾人かの人は今も彼女の仲間に加わつて、歓喜の中にそこで日を送っている。彼女の奇跡を見るために、そこへ降りて行つた高貴なタンホイザーの物語がある」⁽¹⁶⁾。「テューリンゲンのホルゼルベルクはホルダとその軍勢の滞在地であると同時に、魔女たちの集合場所でもあった。カイザースベル

クは、夜にやつて来る女たちを、まさしくヴェーヌスベルク Venusberg に集合させている。快適な生活と踊りと跳躍がそこでは実践されている」⁽¹⁷⁾。

『ドイツ神話学』が刊行されたのは一八三五年だが、その二年後の一八三七年、詩人ハインリヒ・ハイネ Heinrich Heine（一七九七—一八五六年）は『サロン』Salon 第三卷に『精霊物語』Elementargeister を発表し（第一部は、一八三五年、『ドイツ論』De l'Allemagne の中で、フランス語で発表された）、コルンマン版「タンホイザー」を紹介した他、一八五三年、有名な『流刑の神々』Die Götter im Exil におつて、「キリスト教が世界を支配するに至つたとき、ギリシア・ローマの神々が被つた魔神「デーモン」への変身⁽¹⁸⁾」を、民俗学的な視点から告発し、文化の基層に埋もれた異教的世界へ人々の視線を向けた。因みに、我が国では、若き日の柳田國男がこの『流刑の神々』を愛読し、民俗学的思考の着想を得たことが知られている⁽¹⁹⁾。

『少年の魔法の角笛』所収の「タンホイザー」では、ヴェーヌス夫人 Frau Venus は「魔女」eine Teufelinn「女悪魔」と呼ばれ、「聖母マリア」と対比されていた。ヤーコブ・グリムが指摘するように、この異教の女神が、ゲルマ

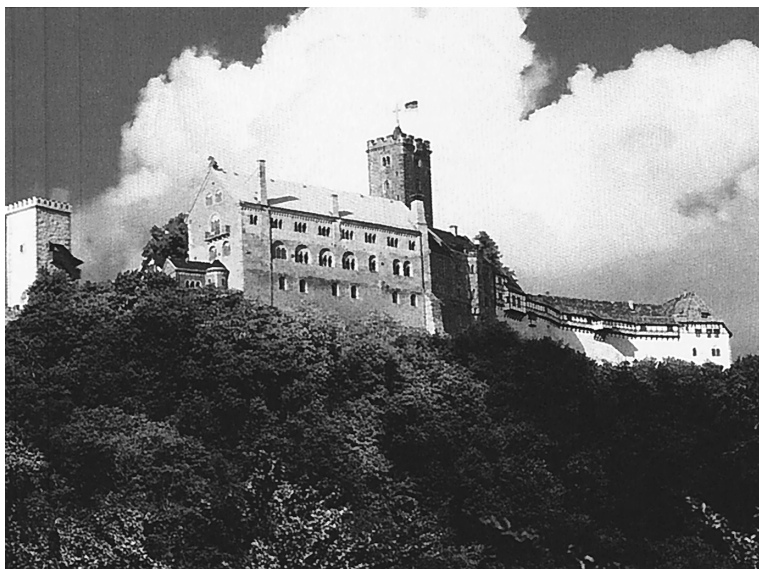
ンの地では、大地母神の系統を引くホレあるいはホルダと同一視されていた事実は、きわめて重要である。タンホイザー伝説は、ヴェーヌス山のモティーフを媒介に、当時の民間信仰の深層を垣間見させてくれる。

それにしても、十字軍に参加した歴史上のタンホイザーと、ヴェーヌス山に籠った後、一度はローマ教皇に赦しを求めたものの、結局、山へ戻り、最後の審判の日までそこに留まった伝説上のタンホイザーとは、何と対照的であることか。(ア) イロニーと才気に満ちた若きタンホイザー、異教の女神の支配する、華やかさの陰に幽暗さを宿すヴェーヌス山のタンホイザー、二つのイメージは、波乱に満ちたこの人物の生涯の軌跡を明瞭に描き分けている。

タンホイザーとヴェーヌス(山)のモティーフは多くのドイツ作家たちの心を捉えた。古くは、一五二五年以来、ビラのかたちで流布した民謡が伝えられるが、ロマン主義の時代、ルートヴィヒ・ティーク Ludwig Tieck (一七七三—一八五三年) の「忠実なエッカルトとタンホイザー」*Der getreue Eckart und der Tannenhäuser* (一七九九年初版)⁽²¹⁾ が人気の口火を切った。ヴィーヌス山の麓にいて、山に入ろうとする人々に入ると警告をする騎士エッカルト、

すでに中世末期、ハンス・ザックス Hans Sachs (一四九四—一五七六年) は、一五一七年作の謝肉祭劇「ヴィーナスの家来」*Das Hofgsind Veneris* の中で、この人物に重要な役割を演じさせていた。女王ヴィーヌスの許に次々にやってくる騎士、博士、町人、百姓、傭兵等に向かって、エッカルトは愛の女神の矢に射抜かれないように「早く逃れよ」と警告する。しかしそれは空しく、ヴェーヌスは踊りや奏楽や歌など「気晴らし」に満ちた山へ人々をますます誘う。

ティーク以後、先に紹介したアルニム／ブレンターノ編『少年の魔法の角笛』(一八〇六年)の他、J・G・ビューツ シング Büsching (一七八三—一八二九年) 編『伝説・昔話・聖者伝』*Volkssagen, Märchen und Legenden* (一八二二)⁽²³⁾、グリム兄弟編『ドイツ伝説集』(一八一六年)、さらにH・ハイネが『精霊物語』以外に、『新詩集』*Neue Gedichte* (一八四四年刊) に「タンホイザー」(一八三六年作)を収録したが、恐らくそれにも触発されて、作曲家リヒャルト・ヴァグナー (一八一三—一八八三年) は歌合戦のモティーフを合体させた歌劇『タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦』*Tannhäuser und der Sängerkrieg auf*



図版 4 ヴァルトブルク城（アイゼナハ）

Wartburg を創作、一八四五年にドレスデンで初演した。彼は『タンホイザー』を一八四一年にパリで計画し、翌年ドイツへ帰郷した際に、アイゼナハとヴァルトブルクの風景にインスピレーションを得て、それを自作に採用したようである。⁽²⁵⁾ テューリングゲンの森に囲まれた小高い山に建つヴァルトブルク城一帯の光景（図版 4）は、実際、今日でもなお、中世のロマン的世界に我々を誘って止まないが、ヴェーヌスが住むと伝えられるヘルゼルベルクはこの城に近く、アイゼナハ近郊はまさしく、ドイツでも有数の伝説の故郷と言ってよい。

第二章 ローエングリン Lohengrin

グリム兄弟編『ドイツ伝説集』には、白鳥の騎士ローエングリンに関連した作品が七篇収められている。⁽²⁶⁾ 五三九「カール・イーナハ、サルヴィウス・ブラボンそして白鳥夫人」Carl Ynach, Salvius Brabon und Frau Schwan（B D K 版五三三）、五四〇「白鳥の騎士」Der Ritter mit dem Schwan（B D K 版五三四）、五四一「ライン河の白鳥の舟」Das Schwanschiif am Rhein（B D K 版五三五）、五四

二「ブラバントのローエングリーン」Lohengrin zu Brabant (B D K 版五三六)、五四三「ロートリンゲンでのローエングリーンの最期」Loherangrins Ende in Lohringen (B D K 版五三七)、五四四「白鳥の騎士」Der Schwanritter (B D K 版五三八)、五四五「善良なゲルハルト・シュヴァン」Der gute Gerhard Schwan (B D K 版五三九) がそれだが、中でも「ブラバントのローエングリーン」はこのタイプの典型を示している。全訳で紹介したい。

ブラバントとリムブルクの公爵は、エルスあるいはエルザムという名の若い娘以外には後継ぎを残さずに亡くなった。公爵はこの娘を死の床で家臣フリードリヒ・フォン・テラムントに託した。フリードリヒはスウェーデンのストックホルムで童を退治したことのある勇敢な英雄であったが、今度ばかりは傲慢になって、公爵令嬢が結婚を誓ったと偽って申し立て、彼女と国土を獲得しようとした。令嬢が毅然としてこれを拒絶したので、フリードリヒはハインリヒ鳥刺帝に訴え出た。判決が下された。すなわち、令嬢は、フリードリヒに対抗する勇者によって、神の裁きで、わが身を守らなければならない、

と。そのような勇者は容易には見つからなかった。令嬢は一心不乱に神に救いを求めて祈った。その時、遙かに遠いモンテサルヴァチュの聖杯城で、誰かが緊急に助けを必要としていることを告げる鐘の音が鳴り響いた。そこで直ちに聖杯城では、バルツイファルの息子ローエングリーンを派遣する決定が下された。ローエングリーンが足を鎧に乗せようとしたまさにその時、一羽の白鳥が水面を漂ってきた。後ろに一艘の舟を曳いていた。白鳥を目にするや否や、ローエングリーンは叫んだ。「馬を飼う葉桶の所へ戻せ。私はこの白鳥が導くままについて行こう。」神を信じて、彼は食料を舟に積み込まなかつた。五日間、海の上を進んだあと、白鳥は嘴を水中に入れ、小魚を捕えると、半分を食べ、他の半分を王子に食べるように与えた。

その間、エルザムは国中の領主や家臣をアントワープに招集した。まさにその会議の日に、人々は小舟を曳いた一羽の白鳥がシエルデ河を遡って来るのを見た。舟にはローエングリーンが楫の上に身を伸ばして眠っていた。白鳥は岸に着いた。王子は喜びの中に迎えられた。彼の兜と楯と剣が舟から運ばれると、白鳥は直ちに戻って行

った。ローエングリーンは今や公爵令嬢が被っていた不正のことを聞いた。そして彼女のために闘うことを喜んで引き受けた。エルザムはそこですべての親類縁者と家臣を呼び寄せた。彼らは進んでやって来たが、大変な人数であつた。母方の家系のゴットハルト王も、クラールブルンの僧院長グンデマルに招かれて、イギリスからやって来た。一行はそれぞれ出発し、後に合流して一同はザールブルュッケンへ進み、そこからマインツを目指した。フランクフルトに滞在していたハインリヒ皇帝もマインツへ出迎えにやって来た。そしてこの町にローエングリーンとフリードリヒが闘うことになる場と席が設けられた。聖杯の勇者が勝利した。フリードリヒは公爵令嬢を欺いていたことを白状し、槌と手斧で処刑された。エルザムは今やローエングリーンと結ばれた。彼らはその前から互いに愛し合っていたのだつた。しかし、彼はあらかじめ密かに記憶にとどめていた。すなわち、彼の素姓に関するあらゆる質問を彼女の口が発することを避けなければならぬ、何故なら、そうでなければ、彼は直ぐに彼女を残して去らなければならないから、と。

しばらくの間、結婚した二人は何ものにも邪魔されず

幸せに日々を送っていた。ローエングリーンは賢明に力強く治めていた。フン族や異教徒に対する遠征で、彼は皇帝のために大きな勲功を挙げた。しかしある時、槍の試合で、クレーヴェの公爵を馬から突き落とし、公爵が腕を折るという事件が起きた。するとこれを妬んで、クレーヴェ公爵夫人は婦人たちに声高にこう語った。「ローエングリーンは勇敢な英雄かも知れませんが、それにキリスト教を信仰しているようですが、残念なことに、貴族としての階級のために彼の名声は低いのです。というのは、彼が何処からこの国に流れ着いたのか、誰も知らないからです。」この言葉はブラバント公爵夫人の胸に突き刺さつた。彼女は顔を赤らめ、蒼白となつた。夜、寢床の中で、夫が彼女を腕に抱いたとき、彼女は泣いた。彼は言った。「ねえ、何故、そなたは心乱れているのだ？」彼女は答えた。「クレーヴェ公爵夫人が私を深く悲しませているのです。」しかしローエングリーンは沈黙し、それ以上は尋ねなかつた。二日目の夜も夫人は泣いた。彼はそれに気付き、彼女をまた宥めた。しかし三日目の夜、エルザムはもはや自分を抑えることが出来ず、こう言った。「ご主人様、怒らないで下さい。私は知り

たいのです、何時、あなたがお生まれになったかを。何故なら、私の心はあなた様が高貴な方であると語っているからです。」夜が明けると、ローエングリーンは彼が何処の家系の者かを説明した。パルツィファルが彼の父であること、そして神が彼を聖杯城から派遣した、と。そうしてから、彼は夫人との間に生まれた二人の子供を連れて来させ、彼らに口づけし、彼が残してゆく角笛と剣を大事に保管するように命じた。夫人には、かつて母が彼に贈った指環を与えた。その時、彼の友人である白鳥が小舟を曳いて急いで泳いで来た。王子はそれに乗り込み、水路を辿って聖杯の職務へと戻って行った。エルザムは氣を失ってくずおれたので、人々は楔で彼女の齒をこじ開けて、水を流し込まなければならなかった。皇帝と帝国が遺児を引き取った。子供たちはヨーハンとローエングリーンという名であった。未亡人となった公爵夫人は泣き、二度と戻っては来ない愛する夫を想い、残りの人生を悲嘆の中に暮らした。⁽²⁷⁾

時はハインリヒ鳥刺帝の世、場所はブラバント公国。公爵が死に、公国と令嬢を託された家臣が逆にそれを狙う。

窮地に陥った令嬢、その時、聖杯城から派遣されて、一人の騎士が白鳥の曳く舟で到着する。そして悪しき家臣と闘い、勝利し、自分の素姓を尋ねない約束で令嬢と結婚する。しかし、あるきっかけで、夫人が素姓を訊ねたため、騎士は己の血筋を明かし、聖杯の国へ立ち去って行く。「白鳥の騎士」伝説は、以上を骨格とする深い余韻に満ちた物語である。

前述のように、グリム兄弟編『ドイツ伝説集』は右のDS五四二を含めて、全七篇の「白鳥の騎士」伝説を収録しているが、一般に、伝説 *Sage* というジャンルは、昔話 *Märchen* とは異なり、具体的な時や場所との繋がりを——史実そのものではないにしても——一応は保っている。⁽²⁸⁾ DS五四二に関して言えば、「ハインリヒ鳥刺帝」Heinrich der Vogler と「ブラバント」Brabant という人名と地名から、物語の舞台が特定されるが、「白鳥の騎士」伝説の背景をさらに深く探るため、あらためて、DS所収の七篇の時と場所を整理しておきたい。

まず、時系列に即して見ると、DS五三九「カール・イーナハ、サルヴィウス・ブラボンそして白鳥夫人」は〈古代ローマ〉(ユリウス・カエサル等)、DS五四三



図版 5 プラバント周辺地図

「ロートリンゲンでのローエングリーンの最期」は「西暦五〇〇年」、DS五四一「ライン河の白鳥の舟」は「七一一年」、DS五四四「白鳥の騎士」および五四五「善人ゲルハルト・シュヴァーン」は「カール大帝」(在位七六八―八一四年)、DS五四二「プラバントのローエングリー」は「ハインリヒ鳥刺帝」(在位九一九―九三六年)、DS五四〇「白鳥の騎士」は「皇帝オットー一世」(在位九三六―九七三年)がその時代である。

次に空間系列(図版5)に沿ってDS七篇を見ると、同じ順に、DS五三九はトネレ(「トングレン」)(今日ベルギー)とローマを結ぶ都市群、DS五四三はプラバント(ベルギー)とルクセンブルク、DS五四一はクレーヴェ(ドイツ)とニムヴェーゲン(オランダ)、DS五四四はプラバントとノイマーゲン(「ニムヴェーゲン」、DS五四五はライン河畔とアルデネン(ベルギー)、DS五四二はプラバント、DS五四〇はフランドル地方(ベルギー／フランス／オランダ)が主な舞台となっている。

従って、時系列は、古代ローマを起源に、メロヴィンゲ朝／カロリング朝／ザクセン朝の時代、空間系列は、プラバントを中心に、今日のベルギー、ドイツ、オランダ、ル

クセンブルクを含むライン河下流域とアルデンヌ高原および北海に囲まれた地域が「白鳥の騎士」伝説のおおよその範囲であることが分かる。

『昔話百科事典』Enzyklopädie des Märchens等の記述によれば、「白鳥の騎士」(独語 Schwanritter / 英語 Swan Knight)は、中世ヨーロッパで広く流布した伝説の一つ²⁹⁾で、ラテン語、仏語、独語、西語、英語、伊語、さらにアイスランド語によるテキストが知られているが、最古のものは、『白鳥の騎士とゴドフロワの子供たち』(Le Chevalier au Cigne et les Enfants de Gaudefroi (一一七〇／九〇年)に見出されるよう³⁰⁾だ。

他方、伝説の主人公「ローエングリーン」の名は、ドイツ語圏文学においては、中世の叙事詩人ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ Wolfram von Eschenbach (一一七〇頃—一二二〇年頃)の『パルチヴァール』Parzival (一二一〇年頃)第十六巻に初めて、聖杯王パルチヴァールの息子ロヘラングリーン Lohengrin³¹⁾として登場する。

そこで、前者「ゴドフロワ」および後者「パルチヴァール」＝「聖杯王」を導きの糸に、先の時と場所の確認を踏まえ、以下、「白鳥の騎士」伝説の歴史的・神話的な深層

を探ってみることにしたい。

ゴドフロワ・ド・ブイェン Godefroy de Bouillon

さて、前述『白鳥の騎士とゴドフロワの子供たち』は十二世紀末の歌謡で、内容は次の通りである。

「ブラバントの」ブイヨン公爵の未亡人は、義弟であるザクセンのレニールに姦通罪で訴えられ、領土を奪われる。皇帝オットー「一世」によってニムブルクで裁判が行われた日、ライン河を一羽の白鳥に曳かれて舟が現れる。中には騎士が横たわっている。騎士は、神明裁判とみなされた一騎打ちで敵を倒し、窮地に陥った公爵夫人を救う。騎士は夫人の娘と結婚し、ゴドフロワ・ド・ブイヨン「ドイツ名、ゴットフリート・フォン・ブイヨン」の先祖となる³²⁾。その後、素姓を尋ねないという婚前の約束を妻が破ったため、騎士は家族と国を離れ、白鳥の舟で故国へ帰って行く。

物語は、ザクセン朝第二代のドイツ王オットー一世(在位九三六—九七三年)(のち神聖ローマ皇帝)の時代である。ブラバントは、マース河とシエルデ河に挟まれたベル

ギー北部と東部、およびオランダ南部に広がる地方で、元来はフランク族のガウGau（行政区）ブラカントウムBrachantumであったが、西暦八七〇年、ロートリンゲンと共に、王国に帰属し、ニーダー「低」・ロートリンゲン公爵領となった。一一〇六年以後は、ルーヴァン伯爵が公爵となり、一一九一からブラバント公爵を名乗った。⁽³³⁾ゴドフロワ・ド・ブイヨン（一一〇六頃—一一〇〇年）は、一一〇八年からロートリンゲン伯爵となったが、彼の名を一躍有名にしたのは、第一回十字軍である。⁽³⁴⁾（図版2）一一〇九六年、ゴドフロワ伯は二万の軍を率いて遠征に出発し、コンスタンティノーブル経由でエルサレムを目指し、一一〇九九年七月、そこを陥落させたが、その際、伯は主力部隊を指揮、決定的な役割を演じた。一週間にわたって市街地を掠奪し住民を殺戮したキリスト教徒（フランク人）の残虐行為は、「史上拭いがたい一大汚辱」⁽³⁵⁾と言われる。エルサレム王となったゴドフロワ伯は、王号を憚って、自ら「聖墓の守護者」と称し、同地で没した。

以上が歴史上のゴドフロワ伯である。「白鳥の騎士」伝説は、武勲詩chanson de gesteの伝統とブイヨンおよびブラバント家の由来譚が結び付いて成立した物語に他なら

ない。

ところで、グリム兄弟編『ドイツ伝説集』は、興味深いことに、過去をさらに遡る「白鳥の騎士」伝説を採録している。DS五三九「カール・イーナハ、サルヴィウス・ブラボンそして白鳥夫人」（出典は一五四八年、パリで刊行されたジャン・ルメール著『ガリアの名士たち』⁽³⁶⁾）がそれである。最後にを紹介したい（以下要約）。

ゴットフリート「独語名」（＝ゴドフロワ）はトネレ（＝トングェルン）「現ベルギー」の国王で、マース河の辺メーハの城に居を構えていたが、息子カール・イーナハが未婚女性に暴行を働いたため国外追放した。カールはローマへ逃れ、オクタヴィウスの許に身を寄せ、その後、アルカディアへ逃れた際に、地方総督ルキウス・ユリウスの娘ゲルマーナと恋仲となり駆け落ちした。その途次、フランスのカンブレで、白鳥がゲルマーナの膝に庇護を求めて以来、彼女はドイツ名シュヴァーン「白鳥」を名乗った。シェルデ河畔ブリュッセルでカールは父の訃報を聞き、夫人「シュヴァーン」と共に故国へ帰った。二人の間に息子「オクタヴィアン」と娘「母と同じシュヴァーン」が生れ

た。当時、ザクセン国王とユリウス・カエサルが戦っていたが、ザクセンに味方したカールは戦死した。寡婦となったゲルマーナ「シュヴァーン」は子供たちとメーハの城に暮らした。クレーヴェの城に駐屯していたカエサル軍に、トロイアの英雄ヘクトールの息子フランクスの血を引くサルヴィウス・ブラボンという勇士がいた。彼は白鳥に曳かれる小舟に乗って、メーハの城へ来て、白鳥夫人から、彼女の兄カエサルとの和解の仲介を頼まれ、それを叶えた。ブラボンは、皇帝の姪で白鳥夫人の娘シュヴァーンと結婚し、シエルデ河地方の土地を授かった。以来、当地はブラボンに因んでブラバント、トネレはゲルマーナに因んでゲルマニアと称された。⁽³⁷⁾

古代ローマとガリアを舞台に、歴史とフィクションが入り混じる雄大な物語である。地名ブラバントの由来に、古代と中世、ローマとガリアが絡むこの伝説においては、ローマ軍の戦士サルヴィウス・ブラボンがローエングリーンのいわば原像として登場している。DS四二三「フランク族の由来」に拠ると、トロイア落城後、フランコ一族がライン河の川下に漂着し、小トロイア、クサンテン Xanten

を築いたという。⁽³⁸⁾ブラバントとフランク人は、伝説の上で、トロイアと繋がるのである。カエサルの『ガリア戦記』⁽³⁹⁾の中では、ベルギウム「ベルギー」のマース河はモサ、シエルデ河はスカルデイス、南部アルデンヌ山地はアルドゥエンナと呼ばれ、これらに囲まれた南ブラバントにはアトウアートゥキー族、その東モサ河からレーヌス河「ライン河」の間の地域にエプロネース族が住んでいたが、彼らの防砦アトウアートウカがトネレ「トンゲルン」とされている。

DS五三九「カール・イーナハ……」は、このトネレの国王ゴットフリート（Ⅱゴドフロワ）を原点に物語が展開される。従って、紀元前五一年公刊の『ガリア戦記』の中に、我々は古代ローマ時代のブラバントの原初風景を垣間見ることになる。さらに、ローマ戦士ブラボンを通して、その遙かな遠景に、彼の祖先として、トロイアのヘクトールの姿が浮かび上がってくる。伝説の世界は、こうして、果てしなく過去へ過去へと遡ってゆく。中世の騎士ローエングリーンの背後には、以上のような世界が幾重にも広がっている。

聖杯 Grail

前述DS五四二「ブラバントのローエングリーン」の中で、ブラバント公爵の没後、家臣フリードリヒは、公爵の令嬢と国土を我が物にしようと企み、ハインリヒ鳥刺帝に欺瞞の直訴をする。帝はフリードリヒと闘う勇者を（令嬢が）探すべしとの判決を下す。救いを求めて令嬢が神に祈ると、遠い「モンテザルヴァチュ」の「聖杯」Grailの城で危急を告げる鐘の音が鳴り響き、パルチヴァール王の息子ローエングリーンが派遣されることが決定される。彼が出発しようとする、一羽の白鳥が舟を曳いてくる。その舟に乗って、彼は五日間海上を進み、シエルデ河を遡り、令嬢のいるアントワープに到着する。

以上が、ローエングリーン登場の経緯であった。この伝説の出典の一つは中世ドイツの詩人ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの叙事詩『パルチヴァール』⁽⁴⁰⁾（図版6）である。該当箇所、同書第十六巻の末尾、遅しく成長した聖杯王パルチヴァールの息子ロヘラングリーン Lohengrin は、騎士道に励み、「聖杯」に仕え誉れを挙げる⁽⁴¹⁾。すなわち、「ムンサルヴェーシエから白鳥に運ばれて、神が定



図版6 ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ『パルチヴァール』
（ハイデルベルク歌謡写本）

めたもうた勇士⁽⁴²⁾」として、彼はアントヴェルプ「アントワープ」に到着し、宮廷作法を心得たその立派な振舞によって、当地の女王のミンネを受け、ブラバントの領主となる。但し、自分の素姓を決して問うてはならない、と彼は女王に誓わせる。その誓いが「愛ゆえに」揺らいだため、ロヘラングリーンは、己がパルチヴァールの息子であることを明かし、水路陸路を旅して「聖杯」護持の仕事へと戻って行く⁽⁴³⁾。

グリムがDS五四二の註で指摘しているように、ここに⁽⁴⁴⁾

は敵役の家臣フリードリヒは登場せず、ストーリーはそれだけ単純なものになっているが、それにしても、主人公ローエングリーンは何故に自分の素姓を問わないように、妻となるべき女性に誓わせるのだろうか。また、約束が破られると、彼は、何故に、決まって、元「もと」来た場所へ戻って行くのだろうか。ローエングリーン伝説の根本的な謎はそこにある。

騎士ローエングリーンが帰還する場所は、叙事詩『バルチヴァール』では〈ムンサルヴェーシエ〉Munsalvaesche、DS五三六では〈モンテ「ト」ザルヴァチュ〉Montsalvaeschと呼ばれ、その城には「聖杯」Gral⁽⁴⁶⁾が秘蔵されている。選ばれた者によって、それは守られている。その引力が、結局、主人公を城へ引き戻すのである。叙事詩『バルチヴァール』の騎士ロヘラングリーンは「聖杯に仕えて」⁽⁴⁵⁾in des grales dienste⁽⁴⁶⁾譽れを挙げ、最後は、「聖杯護持」in des grales pflege⁽⁴⁶⁾の仕事に戻って行く。「聖杯」は彼に⁽⁴⁷⁾まさしく世界の中心に他ならず、それは秘密にされなければならない。妻に己の素姓を隠すのも、素姓を明かした場合、家族を捨て城へ帰るのも、すべては「聖杯」に原因がある。

中世ヨーロッパの伝説は、様々な系統の物語が複雑に組み合わさって形成されている。そこで、ローエングリーンの源流を探るために、あらためて、彼の父バルチヴァールの家系図を確認しておきたい。⁽⁴⁷⁾バルチヴァールの父はガハムレト、アーサー「独語ではアルトゥース」王の家系、母はヘルツェロイデ、彼女はガハムレトの二番目の妻で、テイトレルを先祖とする聖杯の家系の出身である。またローエングリーンの母コンドヴィーラームールスの母方の先祖はアーサー王の家系、父方は聖杯の家系である。従って、ローエングリーンは父方と母方において、アーサー王の家系と聖杯の家系に二重に繋がっている。

ところで、キリスト教的な騎士道精神を代表するバルチヴァールが初めて登場するのは、フランスの詩人クレチアン・ド・トロアChr tien de Troyes（一二三五頃―一一九〇前）の『ペルスヴァル、または聖杯の物語』Perceval ou le conte du Graal（一二八〇年頃）（未完）とされる。クレチアンはシャンパーニュ伯とフランドル伯の宮廷に仕え、イギリスを訪れたとも言われ、ある時期以後、アーサー王とその騎士たちをめぐる伝承圏に題材を求めた。中でも、『ペルスヴァル』は、キリスト教徒の完成を騎士道の究極

目標とする「宮廷風騎士道物語」roman courtoisの模範となった。この韻文作品の続篇として書かれたのが、ロベール・ド・ボロン Robert de Boron（一二〇〇年頃）の『アリマテアのヨセフ、または聖杯物語』、ヴォルフラム・フォン・エッシエンバハの『パルチヴァール』（一二一〇年頃）、そしてトマス・マロリー Thomas Malory の『アーサー王の死』 Le morte d'Arthur（一四八五年）だが、興味深いのは、これらの作品における「聖杯」のイメージである。

ロベール・ド・ボロンに拠ると、「聖杯」は、キリストが「最後の晩餐」で用いた杯であると同時に、槍で突かれたキリストの遺体の傷口から流れ出た血を、アリマテアのヨセフが受けた杯ともされる。後にヨセフが牢に投ぜられたとき、この器の不思議な力によって彼は四十年間その生命を保つことのできたのである。⁽⁴⁸⁾「聖杯」は、従って、十字架上のキリストの死が人類にもたらす救済のシンボルである。

クレチアン・ド・トロワの『ペルスヴァル、または聖杯の物語』はどうだろうか。そこでは、「聖杯」は多くの高価な宝石が嵌め込まれた純金製の器である（六 グラアル

の城）。訪ねてきた甥のペルスヴァルに、隠者「伯父」は語る。「あの器「グラアル」で運ばれて供されるのは聖餅「ホスチア」のみ。それが王の生命を支え、力づける。グラアルとはかくも聖なるもの」（二三 ペルスヴァルと隠者）である。⁽⁴⁹⁾と。

ヴォルフラム・フォン・エッシエンバハの『パルチヴァール』を覗くと、第九卷、隠者トレフリツェントはパルチヴァールに聖杯の不思議をこう説明する。「ムンサルヴェーシエ城の聖杯」のもとには、多くの勇敢な騎士が住んでいる。彼らはある「一つの石」によって養われる。その石は「人の肉や骨がその若さを保つ力」を与え、グラールとも言われ、「キリスト受難の聖金曜日」に、一羽の鳩が空から舞い下り、「聖餅」をこの聖石の上に置くと、飲み物と食べ物が準備される、と。⁽⁵⁰⁾

以上、聖杯のイメージは、「最後の晩餐」を起点に、王の生命を支えるための「聖餅」を運ぶ高価な器、「若さ」を保つ力を与える「石」といった具合に、作品ごとに変容するが、核心には、キリストの血（葡萄酒）と肉（パン）、「生命」を養う聖なる力の意味が内在しているようである。アーサー王の円卓の騎士の一人で、様々な試練のあとに聖

杯城の王となったパルチヴァール、彼の息子ロヘラングリーンは、アーサー王の命令で、苦境にあったブラバント公国の令嬢を救うべく、白鳥に曳かれた舟で到来する。そして見事、敵を倒し、令嬢と結婚するが、妻がタブーを破って彼の素姓を訊ねたため、秘密護持のため、聖杯城へと戻って行く。

ローエングリン伝説は、以上見るように、「聖杯」という求心力と、騎士の冒険（乙女の救済、等）という遠心力の均衡の力学をその基本構造としている。中世以来語り伝えられてきた神秘的なロマンは、グリム以後では、十九世紀中葉、リヒャルト・ヴァグナーのオペラ『ローエングリン』Lohengrin（一八五〇年）によって再度、脚光を浴びた。

結語

騎士タンホイザーとローエングリンの伝説は、典型的に中世ヨーロッパ的な世界を映し出す、ある意味、好一對をなしている。

詩聖ゲーテは、アルニム／ブレンターノ編『少年の魔法

の角笛』を献呈された際、その書評の中で、「タンホイザー」（八六）の項に「偉大なキリスト教的―カトリック的モチーフ」とメモした⁽⁵¹⁾。カトリックの総本山とヴェーヌス山、キリスト教信仰と現世的欲望の間で揺れ動く騎士タンホイザーの姿は、中世に生きる人間を代表していると言えるが、彼の在り様は、中世に限らず、ある種、普遍的な次元で、時代を超えて、人間心理の奥底に潜む二つの極欲望と敬虔、放縱と節度といった二律背反を体現している。現代に生きる我々にとっても、問いかける何かを有しているのはそれ故である。

タンホイザーの最初のビラ（民謡）が流布した（一五一年）頃、ドイツの作家では、ハンス・ザックスが謝肉祭劇『ヴィーナスの家来たち』（一五一七年）の中で、この異教の女神の威力を、滑稽味を交えて、舞台にのせた。それから間もなく、画家ルーカス・クラナハ Lukas Cranach（一四七二―一五五三年）は、有名な『ヴィーナスと蜂蜜を盗むキューピッド』Venus mit Amor als Honigdieb（一五三〇年）（図版7）を描き、エロティックなその画面から、快楽は苦痛を、ヴィーナスは病（＝梅毒）を連れてくる、という警告を発する。画面左上のラテン語の

銘はこう語る。「キューピッドが蜂の巣から蜜を盗もうとしたとき、蜂は針で泥棒の指を刺した。同様に、束の間の快楽を求めると、我々は傷を負う。快楽は激しい苦痛を伴うのだ。」⁽⁵²⁾文学と絵画、いずれにおいても、ドイツの中世末期、美と愛の異教の女神は、抗い難いその魅力の故に、警戒の対象となっていたのである。タンホイザー伝説はそうした時代の雰囲気を実に物語っている。

一方、白鳥の舟で到来する騎士ローエングリンは、その登場の仕方がそもそも印象的だが、この伝説は、カール大帝と並び称される中世ヨーロッパの英雄、アーサー王の



図版7 ルーカス・クラナハ『ヴィーナスと蜂蜜を盗むキューピッド』
1530年（コペンハーゲン国立美術館）

伝承圏に属している。白鳥の騎士伝説は、宮廷風恋愛、あるいは騎士道精神の世界を視く上に不可欠のテクストである。主人公ローエングリンの行動（敵の打倒／令嬢との結婚）の背後には、「聖杯」の存在がたえず意識される。モンテザルヴァチュとブラバント、聖杯城と俗界、中心と周縁、求心力と遠心力、これら二つの力が牽引し合う場で繰り広げられる人間模様を、ローエングリン伝説は描き出している。読者の心に余韻が残るのは、恐らく、物語のこの深層構造に起因する。ブラバント公国の歴史に「聖杯」のモチーフが加味されることによって、「白鳥の騎

士」物語はいよいよその陰影を増してくる。

タンホイザーとローエングリン、この二人の人物はいずれも、十字軍という中世ヨーロッパの一大事業に深く関わっていた。彼らをめぐる伝説は、ほぼ一千年の時空を超えて、我々を中世の只中へ案内してくれる。聖と俗、神秘と現実が拮抗し交錯する世界、そこに生きる人間を通して、伝説は、過去を現代に蘇らせ、現代を過去に投影させながら、時空を自在に往還させてくれる。

注

事典・辞典類、昔話研究とグリム関係の文献は、略号を含めて、(1) カロリング朝末尾、「タンホイザー」と「ローエングリン」他は本稿末尾の「主要参考文献」を参照されたい。なお、文中DS番号はウター編に拠る。

註

- (1) Brüder Grimm, Deutsche Sagen (BDK), S.218-219.
- (2) Arnim/Brentano, Des Knaben Wunderhorn
- (3) aa.O., S.60-63.
- (4) aa.O., S.61-63.

- (5) EM, Bd.13, S.182-186. (Tannhäuser) /E.Frenzel, Stoffe der Weltliteratur, S.731-733. /Horst Brunner/Mathias Herweg (Hg), Gestalten des Mittelalters, S.432-436.
- (6) 註(5)
- (7) Minnesang. Mittelhochdeutsche Liebeslieder. Eine Auswahl. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. (Reclam)
- (8) Deutsche Gedichte des Mittelalters.Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch. (Reclam)
- (9) Deutsche Gedichte des Mittelalters, S.238-249.
- (10) Minnesang, S.94-97.
- (11) Deutsche Gedichte des Mittelalters, S.250-257. 邦訳『ミネルザンク』(ドイツ中世叙情詩集)・高津春久編訳、郁文堂、一九七八年、六四―六九頁、「解題」三六―三六七頁。
- (12) dtv Brockhaus, Bd.6, S.130-131. Gestalten des Mittelalters, S.119-121.
- (13) EM, Bd.13, S.1379-1385. (Venus)
- (14) E.Frenzel, Stoffe der Weltliteratur, S.731.
- (15) J.Grimm, Deutsche Mythologie, Bd.2, S.780.
- (16) aa.O., S.780-781.
- (17) aa.O., S.882.
- (18) Heinrich Heine Werke, Insel Verlag, Frankfurt a.M.1968, Bd.2, Die Götter im Exil, S.835.

- (19) 柳田國男「幽冥談」(ちへま文庫版『柳田國男全集』三一、一九九一年所収)。
- (20) EM, Bd.13, S.183.
- (21) Ludwig Tieck, Der getreue Eckart und der Tannenhäuser (Ludwig Tieck, Schriften, Bd.6 Phantasmus, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt a.M., 1985).
- (22) 『ハンス・ザックス謝肉祭劇全集』藤代幸一・田中道夫訳、高科書店、一九九四年、第二番「ヴィーナスの家来」Das Hofgsind Veneris
- (23) Volksagen, Märchen und Legenden, gesammelt von Johann Gustav Büsching, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim, 1969, S.373-380.
- (24) 註(81) H.Heine, Bd.1, Neue Gedichte, S.99-107, S.513.
- (25) Richard Wagner, Tannhäuser und der Sängerkrieg auf Wartburg, hrsg. von Egon Voss, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 2008. (Nachwort)
- (26) Brüder Grimm, Deutsche Sagen (BDK).
- (27) aa.O., S.631-634.
- (28) aa.O., S.11 (Vörrede).
- (29) Medieval Folklore, A Guide to Myths, Legends, Tales, Beliefs and Customs, p.398-399.
- (30) EM, Bd.12, S.297. E.Frenzel, Stoffe der Weltliteratur, S.683.
- (31) Wolfram von Eschenbach, Parzival. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch, 2Bde. (Reclam)／ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ『バルチヴァール』(郁文堂)
- (32) E.Frenzel, Stoffe der Weltliteratur, S.683.
- (33) dtv Brockhaus, Bd.3, S.26.
- (34) dtv Brockhaus, Bd.7, S.118. /Gestalten des Mittelalters, S.141-142.
- (35) 『十字軍』橋口倫介著、岩波新書、一九八八(七四)年、一〇五—一〇六頁／『十字軍の研究』セシル・ロリンソン著、橋口倫介訳、白水社、一九八七(七一)年、三九—四一頁。
- (36) Brüder Grimm, DS (BDK), S.617-620.
- (37) aa.O., S.955-956.
- (38) aa.O., S.458, 877. Herkunft der Franken.
- (39) 『ガリア戦記』カエサル著、近山金次訳、岩波文庫、一九八一(四二)年／カエサル『ガリア戦記』國原吉之助訳、講談社学術文庫、一九九七(九四)年
- (40) 註(31)
- (41) W.v. Eschenbach, Parzival, Bd.2, S.664.／邦訳『バルチヴァール』四二九頁
- (42) aa.O., S.666.／邦訳、四二九頁
- (43) aa.O., S.668-670.／邦訳、四二九—四三〇頁
- (44) Brüder Grimm, DS (BDK), S.631.

- (45) 註 (41)
- (46) 註 (43)
- (47) EM, Bd.10, S.603-612. /E.Frenzel, Stoffe der Weltliteratur, S.592-595.／邦訳『ヘルチヤマーレ』「解説」
- (48) EM, Bd.6, S.86-91 (Gral)
- (49) クレチアン・ド・トロロ『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』天沢退二郎訳『フランス中世文学集』2、白水社、一九九一年所収、二〇〇一—二〇一三、二六—二六、二頁
- (50) W.v. Eschenbach, Parzival, Bd.2, S.64-72.／邦訳『ペルチヤマーレ』二五〇—二五二頁
- (51) J.W. Goethe, Sämtliche Werke (BDK), Bd.19, <Achim von Arnim und Clemens Brentano (HG.): Des Knaben Wunderhorn>, S.256.
- (52) Anne-Marie Bonnet/Gabriele Kopp-Schmidt, Die Malerei der deutschen Renaissance, Eine Schirmer/Mosel Produktion, 2010. S.174-175.

中世参事文庫

- * Minnesang. Mittelhochdeutsche Liebeslieder. Eine Auswahl. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Hrsg. von Dorothea Klein, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2010.
- * Deutsche Gedichte des Mittelalters. Mittelhochdeutsch/

Neuhochdeutsch. Ausgewählt, Übersetzt und erläutert von Ulrich Müller in Zusammenarbeit mit Gerlinde Weiss, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2009.

* Wolfram von Eschenbach, Parzival, Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch, 2Bde., Mittelhochdeutscher Text nach der Ausgabe von Karl Lachmann. Übersetzung und Nachwort von Wolfgang Spiewok, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2010.

* J.W. Goethe. Sämtliche Werke, Brief, Tagebücher und Gespräche. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt a.M., Bd.19, 1998.

* Des Knaben Wunderhorn. Alte deutsche Lieder, gesammelt von L.Achim von Arnim und Clemens Brentano, Winkler-Verlag, München, 1972.

* J.G. Büsching, Volkssagen, Märchen und Legenden, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim, 1969.

* Heinrich Heine Werke, 4Bde., Insel Verlag, Frankfurt a.M., 1968.

* Richard Wagner, Tannhäuser und der Sängerkrieg auf Wartburg. Hrsg. von Egon Voss, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2008.

* Richard Wagner, Lohengrin. Hrsg. von Egon Voss, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2009.

* Ernst H. Kantorowicz, Kaiser Friedrich der Zweite, Haupt-

band, Klett-Cotta, Stuttgart, 3. Aufl., 2010.

* Olaf B. Rader, Friedrich II. Der Sizilianer auf dem Kaiserthron, Eine Biographie, Verlag C. H. Beck, München, 3. Aufl., 2011.

* Hubert Houben, Kaiser Friedrich II. (1194-1250), Herrscher, Mensch und Mythos, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart, 2008.

* 『フランス中世文学集2』、白水社、一九九一年（クレチアン・ド・トロワ「ベルスヴァルまたは聖杯の物語」天沢退二郎訳）

* 『フランス中世文学集4』、白水社、一九九六年（「アーサー王の死」作者不詳、天沢退二郎訳）

* 『ドロパトス』ヨハンネス・デ・アルタ・シルヴァ／西村正身訳、未知谷、二〇〇〇年

* 『アーサー王の死』序文 ウイリアム・キャクストン、T・マロリー作／W・キャクストン編、厨川文夫・圭子編訳、ちくま文庫、一九八六年

* 『アーサー王伝説』リチャード・キャヴェンディッシュ、高市順一郎訳、晶文社、一九八九（八三）年

* 『アーサー王ロマンズ』井村君江、ちくま文庫、二〇〇四年

* 『ミネネザング』ドイツ中世叙情詩集、高津春久編訳、郁文堂、一九七八年

* ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ『パルチヴァール』加倉井肅之・伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一共訳、郁文堂、

一九八三（七四）年

* 『ハンス・ザックス謝肉祭劇全集』藤代幸一・田中道夫訳、高科書店、一九九四年

* ワーグナー『タンホイザー』高辻知義訳、音楽之友社、二〇一〇（二〇〇四）年

* ワーグナー『ローエングリン』高辻知義訳、音楽之友社、二〇一一年

* 『ガリア戦記』カエサル著、近山金次訳、岩波文庫、一九八一（四二）年

* 『ガリア戦記』カエサル／國原吉之助訳、講談社学術文庫、一九九七（九四）年

* 『十字軍の研究』セシル・モリソン／橋口倫介訳、白水社、一九八七（七一）年

* 『十字軍』橋口倫介著、岩波新書、一九八八（七四）年

* E・H・カントーロヴィッチ『皇帝フリードリヒ二世』小林公訳、中央公論新社、二〇一一年

図版一覧

図版1 十字軍参加者あるいは巡礼衣装のタンホイザー（ハイデルベルク歌謡写本）

図版2 十字軍の遠征（増補「最新図説」世界史、浜島書店、一九九四年）

- 図版 3 パレルモ大聖堂（シチリア島）
- 図版 4 ヴァルトブルク城（アイゼナハ）
- 図版 5 ブラバント周辺地図（Diercke-Taschenatlas der Welt, dtv）
- 図版 6 ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ『パルチヴァール』（ハイデルベルク歌謡写本）
- 図版 7 ルーカス・クラナハ『ヴィーナスと蜂蜜を盗むキューピッド』一五三〇年（コペンハーゲン国立美術館）